

令和5年2月20日

業務完了報告書

鳴門教育大学教員教育国際協力センター

小澤 大成

1. 案件の概要

(1) 案件名

(和文) 令和4年度課題別研修 「仏語圏アフリカ 理科分野における教授法改善指導者養成」

(英文) Leadership Training on Improvement of Teaching Method for Science Education for Francophone Countries in Africa

(2) 研修期間 令和5年1月16日～令和5年2月10日

(3) 研修員数 20人

2. 研修内容 (添付)

(1) 案件全体概念図

(2) 単元目標毎のカリキュラム構成

(3) 日程表 (単元目標と関連付けたもの)

3. 案件目標 (アウトカム) と単元目標 (アウトプット) の達成度

(1) 案件目標 (アウトカム)

案件目標: 効果的な教員研修の実施に向けて, 研修員の理科分野における教員研修・授業実践能力が向上する。

指標: 研修員の質疑応答および模擬授業・授業研究会の内容に基づき評価する。

達成度: 研修員の質疑応答や模擬授業に「よい理科授業」に必要な要素が含まれているか。また教員研修に関する要素が見られるか

。

(2) 単元目標 (アウトプット)

単元目標①: 各国、所属組織、個人の各段階において教員研修に係る課題を整理できる。

指標：研修員が事前に作成したインセプションレポートの「課題」とその「問題点」に関する記述。4段階評価がB（やや優れている）以上。

達成度：研修員20名中20名が達成した。

単元目標②：理科の授業実践の意義・ポイントを説明でき、理科の授業を立案・実施することができる。

指標：研修員の質疑応答や模擬授業に「よい理科授業」に必要な観点が含まれているか。4段階評価でB（やや優れている）以上。

達成度：研修員20名中20名が達成した。

単元目標③：理科分野の教授法改善にかかる研修手法を説明できる。

指標：研修員の質疑応答に研修手法が取り上げられているか、また授業研究会に研修手法が活用されているか。4段階評価でB（やや優れている）以上。

達成度：研修員20名中20名が達成した。

（3）達成度測定結果（上記達成度の判断根拠およびデータ）

各単元目標の達成度は、本研修に従事した教員が各研修員の質疑応答内容および研修活用案を確認し、チェックシートを用いて測定した。

4. 研修に関する所見（アウトプット達成に貢献した要因、または阻害した要因、工夫した内容及びその結果、過年度との変更点など）

（1）デザイン（研修期間・カリキュラムの構成）

今回の研修期間は4週間である。遠隔での実施であり、学習プラットフォーム（Moodle）を通じて事前に講義テキストおよびビデオにアクセスできるようにした。全体カリキュラムは、講義およびその質疑応答、授業ビデオ観察、グループによる授業計画・授業実施・授業研究会からなり、課題分析ワークショップにより研修員の課題を整理した後、全ての講義・演習を行い、その結果をもとに研修活用案を作成できるよう配慮した。

（2）コンテンツ（カリキュラム内容・研修教材）

- インセプションレポートにおいて課題分析ワークショップでの議論のテーマである「理科授業の現状と課題」および「現職教員研修の現状と課題」について記述させ、課題分析ワークショップでの効率的な議論につなげた。
- 「日本の教育システム」「日本の理科教育の特徴」「学習指導案と教材研究」などの理科授業改善の基盤を支える要素に関する講義を提供した。
- 「授業研究概論」「校内研修の指導」において理科分野の教授法の改善につながる講義を提供した。
- 「ハンズオン教材」において各国でも調達可能な素材を用いた実験を紹介した
- ハンズオン教材で紹介した教材の1つを選んで理科モデル授業を計画させた。そして模擬授業として計画・実践した。模擬授業実施後、自らの授業を授業検討会で振り返り、具体的な改善につながる助言のあり方を考察した。
- 以上のように講義・演習および質疑応答を効果的に組み合わせ、研修員の理科分野における教員研修・授業実践能力が向上するというアウトプット達成に貢献した。
- 講義テキストについては全て仏語に翻訳し、講義終了後の研修員の自主学習に配慮した。

(3) ファシリテーション

研修テキストおよびビデオを用いた事前学習ののち、質疑応答を通じて疑問点をあきらかにするという参加型学習の手法をとり、研修員が自ら重要点を発見するよう留意し、アウトプット達成に貢献した。また授業計画の演習の際は各グループごとに議論ができるよう、ブレイクアウトルームを活用した。

(4) 研修員（資格要件の妥当性、専門性・理解力・意欲）

資格要件に外れた研修員はいなかった。研修員は、各国の現職研修に関連した教育行政官、学校管理職あるいはリーダー教員であり、教育に対する高い専門性をもっていた。また質疑応答でも意欲的であり、積極的に質問を行っていた。その結果日本の理科教育および教員研修の基礎知識をよく理解していた。また模擬授業の計画・実施・実践についても日本型理科授業の手法をよく理解して取り入れていた。

(5) 研修環境

研修運営体制としては、JICA、受入機関が協力してコースを問題なく終了することができた。

(6) 事前活動（事前活動のある案件についてのみ記載）

(7) 事後活動（事後活動のある案件についてのみ記載）

(8) その他の特記事項

特になし。

5. 次年度へ向けた改善点及び提案

(1) 評価会及び反省会における指摘事項

研修員より、「質疑応答の時間をもう少し長くってほしい」という改善提案があった。
Moodle 上にフォーラムを設け、対応することとした。

(2) 次年度以降の改善計画（案）

次年度以降の研修について、ハンズオン実験内容の多様化をさらに図ることとした。